世界短篇小說大系

南北歐歐

纖細な而も美しい筆でリヅミカルに自然描寫をするあたりの巧さは實に驚嘆に値する。彼女は作家であると同時に評論家としても有名である、著作數は二十の多きにのぼつてゐる。

アッティリオ・ロビネルリ（――）

現存してゐることは確かであるが調べが及ばないのは遺憾である。

彼はナイーヴなセンチメントを持つ作家で女に好まれる作を書く。大作はないが小品を多く出してゐる。

コルラド・ゴヴオニ

グィード・ゴッツアノ

未來派作家に歴史は不必要であることは誰しもが認めるであらう。主將マリネッティと共に彼等は「この世は蠢動の世界である、飛行機上から見た活動の世界こそ我等の棲む大地である」と活動藝術を高唱してゐる人々である、作品の興味は別として、斯うした見界を持つた人々の作として未來派を採つた所以である。

ガブリエーレ・ダンヌンツィオ（一八六三――）

情熱の詩人、愛國の志士として世界的な彼は今や國家の元老の一人である。彼の作品の多くは劇と詩と長篇で、短篇集は「處女小品集」と「ペスカアラ物語」の二種を數へるのみである。

「處女地」は前者の卷頭を飾る散文詩とも言ふべき美文で、彼が十八歳の紅顏時代の創作である。

「お通夜」は後者から採つたもので、彼が羅馬の社交界に揉まれて人生觀も變つてから書いたもので自ら異つた所がある。

――過去の人である――とか、――遲れたる人――とか言ふ非難を聞くが、伊太利の文學入門者は必ず一通り彼の作品を讀むのを見ても、彼の偉大さは證明出來る、何と言つても彼は、矢張り世界有數のロマンティストである。

アルフレエド・パンツィニ（一八六三――）

雄渾なる筆致で諧逆的に社會觀を述べる、珍らしい作家として多くの讀者を持つ。彼はヂョズエ・カルドゥッチの門を出でて、ミラノの高等學校及工藝學校に教鞭を採り、現在でも羅馬で教授

生活を續けてゐる。カルドゥッチ論は廣く讀まれ、一九二〇年に發表した「妻が欲しい」は昨年東健而の譯で苦樂誌上に連載された。

ルイヂ・ピランデルロ（一八六七――）

彼もヴェルガに遲れてシチリア島に産れ、大學は獨逸のボンを卒業した、哲學と言語學を專攻して敎授たる望を持つてゐたが、一九〇四年「故マッティア・パスカル」を發表するに至つて歐洲文壇に持て囃され、目下グロテスク派の主將として歐羅巴並に亞米利加に於いて名聲嘖々たるものである。

「作者を求むる六人の登場人物」は昨年巴里で好評涌く中に長期興行をなし、我が國では築地小劇場で非公開に上演した。「故マッティア・パスカル」は佛蘭西のアルパトロス・プロダクションに於いて、マルセル・レルビエ監督、イヴアン・モジュヒンの主演で映畫化されてゐる、遠からず我が國へも輸入されることになつてゐるから再びピランデルロの作品に接することが出來る。

ルチアノ・ズッコオリ（一八七〇――）

彼はミラノに産れ一八九八年「モデナの國」なる雜誌を發刊して一九〇〇年まで社長を勤めて

ゐたが、後ヴェネツィアの「ヴェエネツィア誌」に招聘されて主筆となつた。後止めて現在では羅馬に文筆生活を送つてゐる、彼も現代伊太利文壇の元老として今猶雄筆を奮つてゐる。

アーダ・ネグリ（一八七〇――）

閨秀詩人として彼女は詩壇の重鎮である、「霧」は唯一の短篇集「ソリタリエ」の中から撰んだもので女性の或る氣持を遺憾なく表現してゐると思ふ。

穩健な叙情詩人であつたがこの二三年は新らしい傾向を帶びて未來派の雜誌などに詩を書いてゐる。

夫ガルランダ氏は伊太利で有名な工業家であるが彼女の性格や希望を了解して自由に活躍さしてくれた。彼女は「妾の作品に沈着きのあるのは夫の力です」と或る雜誌記者に語つたさうである。六十に近い彼女が未來派に伍して詩壇に活躍する態は實に奇異の感に打たれる。

グラツィア・デレッダ（一八七五――）

彼女はサルデーニヤのヌオーロに產れ、鄉土愛の深い作家である、ヴェルガの去れる今日、女ながらも彼女は鄉土藝術、田園文學の爲に大いに氣を吐いてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

纖細な而も美しい筆でリヅミカルに自然描寫をするあたりの巧さは實に驚嘆に値する。彼女は作家であると同時に評論家としても有名である、著作數は二十の多きにのぼつてゐる。

アッティリオ・ロビネルリ（――）

現存してゐることは確かであるが調べが及ばないのは遺憾である。

彼はナイーヴなセンチメントを持つ作家で女に好まれる作を書く。大作はないが小品を多く出してゐる。

コルラド・ゴヴオニ

グィード・ゴッツアノ

未來派作家に歴史は不必要であることは誰しもが認めるであらう。主將マリネッティと共に彼等は「この世は蠢動の世界である、飛行機上から見た活動の世界こそ我等の棲む大地である」と活動藝術を高唱してゐる人々である、作品の興味は別として、斯うした見界を持つた人々の作として未來派を採つた所以である。

非常に不親切な至らない紹介ですが之で作者の紹介を終りました、未熟な我々の語學の力で譯したのですから、如何に努力したところで多少の誤譯は避けられません、併し今のところは充分努力もし、相當自信も、責任も持つて之を完成したのです。他日に至つて誤れる個所を發見した場合には何かの機會に改める積りでゐます。小さい所は別として、作家の傾向だけは少なくとも掴んだ積りです、茲を掬んで戴ければ大變に有り難いと思ひます。

香櫨園にて

佐藤雪夫

西班牙文學に就いて

概念として、北歐の文學と南歐のそれとの間に、明瞭な色調の差があることは誰でも認めてゐる。さうして、等しく南歐文學といはれるところの佛蘭西物、伊太利物、西班牙物の間にも、やはり、たしかに識別しうる相異が肯定されるやうである。

實際に、佛伊西三國の文學は、その民族の氣質やその風物を包む空氣のやうに、烈しく熱いものと、輕く明るいものとから成ることは共通だが、その共通性のうちに、三者がまたそれ〴〵の特徴を發揮してゐることも爭はれない。例へば、佛蘭西文學が情操の高いかほりや手法の細かさに於て優つてゐるとか、伊太利文學が情熱の烈しさや色澤の輝かしさに於て秀でゝゐるとか、西班牙文學が情感の率直さや筆觸の勁さに於て勝つて見えるとかいつたやうなところ。

こんな風に、西班牙文學は佛伊二國の文學とも確かに異つた色調を持つてゐるが、その色調を作りだしてゐるものは、實は、豐かな想像力が生んだ奇拔な構想と、何處までもリアリスチックでしかも線の太さを失はぬ描寫とに外ならない。

西班牙文學はその發生の始めから、極めて寫實的なのが特質で、セルバンテスに先立つこと二

百年三百年の文學的モニユメントが悉くリアリズムの傑作であるし、『ドン・キホーテ』その物もこの傾向の代表物と見ることが出來る。或る人はこの國寶に北歐一流の深刻味がないことを指摘してゐるが、そのないことがまた、西班牙文學の特徵だと言へよう。まつたく、セルバンテスがあの奇想天外な事件の中に生動せしめ得た二性格の如きは、かれ獨自の諷刺ユーモアと共に、文學が天才から受けた最も大なる寄與であらうし、同時にまた、寫實文學の最頂點を示すものでもあらう。

すなはち、リアリズムは西班牙文學の古今を貫く本流で、時に思潮がロマンチシズムの方へ外れることあつても、必ずまた元の傾向に立戻つてきて居る。それが、例の豐かな想像力に働かれると、そこに、これも西班牙獨特な諷刺やユーモアが生れるので、現代の西班牙文學は、諷刺とユーモアとを飽和させたリアリズム、とでも言はなければならない特殊なものになつてゐるのである。

さて、作家の紹介に移るが、現代の大家はすなはち、『九十八年代の作家』に外ならない。この九十八年といふのは、米西戰爭が終熄して政治的にも經濟的にも西班牙の慘敗を決定した千八百九十八年のことだが、この年を轉機として、外國（主として佛蘭西）文學から解放された獨自の文學を持たうといふ覺醒運動を始め、その急先鋒となつて働いて以來、半嶋文壇の指導をしてき

た作家達が、この la generaoicn de 98 なのである。ミゲール・デ・ウナムーノ、ピオ・バローハ、ラモン・マリーヤ・デル・バリエ・インクラン、ハシント・ベナベンテ、アソリン等、當時の新進氣鋭が今では殆んど皆老大家で、文壇の中心的地位を失ひかけてゐるのは傷ましい氣がする。

ミゲール・デ・ウナムーノはペレズ・デ・アヤラの謂はゆる、『花を咲くに疲れぬ老幹』で、今でも、思想界に絶えず問題を投げてゐる、名高いサラマンカ大學では學長にまでなつた人、その哲學體系については、桑木嚴翼博士に詳しい研究があると聞いた。彼はまた、幻滅を知らない共和主義者として、しば〳〵筆舌の禍を買ひ、先頃もプリモ・デ・リベーラに睨まれて、カナリヤ群嶋へ流刑の身となつたが特赦された。彼の小説は心理の解剖に奇を求め過ぎた嫌ひあるものゝ、極めて獨創的で、一時は模倣者を無數に出して、西班牙近代小説の先驅をなした。代表作は『戰爭に於ける平和』といふ長篇だが、短篇にも彼の作風をよく示したものが少くない。本大系『西班牙篇』の初めに見られる四篇の如きがそれである。

ピオ・バローハは巧みな説話風の文章で讀者を引きつけて、時には突拍子もない方角へつれて往くこともあるが、作家自身を最もよく發揮し、また見地の自由を決して捨てない一人である。その思想には北歐的傾向があつて、公然アナルキズムに同情してゐるが、取扱ひは矢張り寫實主義である。彼はペレズ・ガルドス以後の多作家で、堂々たる三部作ばかり七つも持ち、その上に

『或る活躍家の記錄』といふ歴史小説を十四五冊出して、まだ續けさうである。彼は永久に衰へを知らぬ作家と言つていゝかも知れない。一昨年書いた『人魚の迷宮』はプラスコ・イバニェスの『マーレ・ノストルム』と並んで、地中海文學の双璧と評されてゐる。『或る活躍家の記錄』は一面冒險小説ではあるが、冒險のための冒險では決してなく、冒險を包含した人生そのものを立派に出してゐる新しい歴史小説だ。彼は北の海岸のバスク種族から出てゐるので、バスク族の風格や生活を主題としたものが多い。代表作としては、アナルキズム小説の『生のための戰ひ』(三部作)や『知識の木』『如是則現世』その他澤山あるが、彼は元來長篇作家で、短篇を以て彼の全幅を想像することは甚だむづかしいと思ふ。

バリエ・インクランは葡萄牙のエサ・デ・ケイロスの影響をうけてゐるらしいが、神秘的な床しい詩人。その小説も情熱の豊かな、象徴詩的の匂ひや色合をもつてゐる。彼はルベン・ダリーオと共に西班牙文學に於けるシンボリズムの創始者だが、今では殆んど筆を捨てゝゐる。しかし、その『春の歌』『夏の歌』『秋の歌』『冬の歌』(四部作小説)や、本大系に譯出された『黒猫』の如きはいつ讀むも快い新鮮味を持つてゐるのである。

『九十八年代の作家』の最初の成功は劇壇から、ホセ・エチェガライを放逐し得たことである。エチェガライの後の劇壇は間もなく、ハシント・ベナベンテの天下となつたのだが、ベナベンテ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は諷刺作家として、『作りあげた利害』その他百にも近い數の劇をかき、千九百二十二年にはノベル文學賞金を受け、二十四年には出生地馬德里の市から『馬德里の寶子』なる新稱號を貰つたけれど、悲しいことに、もうそのずつと前から、創作を絶つてゐる。殊に、小說には筆を染めたことがないので、こゝには多くをいはないでおく。

アソリンといふ名はホセ・マルティーネス・ルイスの雅號である。彼は九十八年代の作家中、最も若い一人で、今日まで、よく時代に對して進むべき方向を指示した。彼の小說も好い感じを出してゐるが、しかし、最大の價値は評論にある、感想にある。練りに練り上げた味の深い筆致で、透徹した人生觀を小品に盛つたり、忘れられたクラシックを選りわけて、その中から眞に美しい珠玉を取出したりする彼を取卷いて、物の見方を學んだのが新時代であると言つてもよい。この意味に於て、『決して飽きず、また決して飽きさせぬ』人であると彼を評したペレズ・デ・アヤラは當つてゐると思ふ。アソリンの物では、『意志』(長篇小說)、『田舍の町々』『西班牙』『カスティリャ』(孰れも小品集)、『古典の餘白に』『古典と近代作家』(共に論集)等が最も多く讀まれたものだが、わたしは、前記三小品集から、一篇づゝを拔いて、譯した。

九十八年代の作家達と時を同じうしながら、中央の文學運動には携らずに、各その鄉土を守つて、新興の文學に寄與するところ多かつた人が三人ゐる。アルマンド・バラシオ・バルデスと、

エミーリヤ・パルド・バサン（千九百二十一年物故）と、ビセンテ・ブラスコ・イバニェスとがそれである。パラシオ・バルデスは先頃危篤を傳へられたが、好いあんばいに癒つたらしい。アストゥリヤ州に閉籠つた高踏的な作家。氣品と淡味とを特徴とし、ユーモアに富んだ美しい筆致で、今猶ほ最も廣い讀者を持つてゐる。『マルタとマリーヤ』『サン・スプリシオ尼』『亡ぼされた山村』等の長篇を代表作とするが、笠井君が譯出した一篇は彼の自叙傳小説『一小説家の小説』から拔いたものである。

エミーリヤ・パルド・バサンは西班牙近代に於ける最大の女流作家であらうが、彼女はゾラの自然主義から加持力主義に還つた人で、ガリシヤ州の風俗を題材にしたものに佳作がある。『マリネーダの話』（短篇集）『大母自然』『ウリョアの古城』（共に長篇）等かそれである。笠井君譯の『生命の泉』は短いながら、代表的の作たるを失はない。

自身我國に來遊したり、作物が映畫になつて來たりして、一番われ〳〵に知られてゐるブラスコ・イバニェスはその後西國の專制政治に反對の宣言を飛行機で撒いたり、佛蘭西から追はれたりして、新作を出す暇もないらしい。漸く例の世界漫遊記『或る小説家の世界週遊』（三冊）を完結した外に、映畫ものを一二種と小説をやはり一二種だしてゐるが、かの世界の紙價を狂はした『默示錄の四騎士』や、地中海小説の完璧たる『マーレ・ノストルム』や、極く初期の鄕土もの

にさへ比肩しうる作はもう出ないやうである。わたしの譯にかゝる『キネマの老婆』は彼の戰爭物のうちでは恐らく最も身のある短篇、他の三篇は、初期の鄕土物を代表する好個のスケッチであることを確信する。

次ぎに、『鼻』の作者フワン・ペレス・スニガは現代輕妙文學の作家として、獨特の地歩を占める者。大作を持たないが、この種の短篇ならば無數に書いてゐる。いさゝか、擽りのつよい點が疵であらうが、その洒脫の旨味に、やはり、西班牙獨特のものがある。

もう一つ輕妙文學の見本として、ムニョス・セーカの『夏冬上戸物語』を入れて置いた。ムニョス・セーカは元來劇作家で、惡巫山戲(アストラカン)の王といふ渾名を持つてゐるくらゐに喜歌劇物(サルスエラ)を書きなぐつてゐる。しかし、一面には極めて眞摯な態度を持し、立派な劇を作るに成功したのみならず、その指導下のコメディヤ座は男女優養成所の觀をさへ呈してゐる。彼の滑稽物はペレス・スニガのそれとも違つて、最もよい落語に見るやうな寫實味を溢らしながら、しかも、無駄の省かれた、特種の藝術を作つてゐる。

新進作家連の代表者として、ラモン・ペレズ・デ・アヤラと、ベンセスラオ・フェルナンデス・フローレスと、コンチャ・エスピーナと、この三人の作物をせひ揃へたかつたが、ペレズ・デ・アヤラの物と、エスピーナの物とは適當の短篇を求めることが出來なかつたために、入れられなかつ

たのは殘念である。

女流作家エスピーナは近頃誰よりも外國へ名を賣つた作家だが、もう五十に近い後家さんである。上品で純潔な國語を使つて、細かい女性的な心理描寫をやるが得意らしい。千九百十三年の『ラ・エスフィンヘ・マラガータ』はアカデミヤの推賞を受けてゐる。その後の作、『風の日の薔薇』『星の戀』『象牙の紡績』等いづれも評判よく、千九百十八年の劇『エル・ハヨン』が諸國語に飜譯されると、それに現はれた近代的な一面が目をひいて、西班牙新文學の代表の如く騷がれたものである。しかし、ペレズ・デ・アヤラこそは詩人としてマチャード兄弟やディーヤス・カネード等と伍し、評論家として一世の木鐸オルテーガ・イ・ガセットと並ぶのみならず、創作家として、實に、現時文壇の最高峰に立つ人なのである。二人の靴屋を題材として、鋭く面白い人生觀を示した彼の『アボロニオとベラミーノ』の如きは何人の追從をも許さない大作で、西牙班文壇に於ける彼の現位地を確定したものだ。わたしは彼のその後に於ける短篇で、彼を代表するものを得たいと思つて探したのだが、つひに得られなかつた。

ペンセスラオ・フェルナンデス・フローレスはペレズ・デ・アヤーラと共に、セルバンテス以來の傳統によつて、西班牙文學の本精神を生きる作家であらうか。彼のユーモアはもはや『ドン・キホーテ』のそれを摩するの境に達してゐると言つても、或ひは過ぎてゐないかも知れない。人

生に對する態度に床しい餘融を見せ、表現にも氣持のいゝニューアンスを出してゐる。千九百二十年の『泥棒がはひりました』（長篇小說）は實に彼の出世作で、その前にも數多の長短篇を出してゐる。本大系のためにわたしが譯出した『死びとの風』一篇は『泥棒がはひりました』以後の彼を代表する作であるが、同時にまた、たしかなリアリズムの上に立つユーモアがいかに西班牙文學の新色調を作るに至つてゐるかをも知らせる作である。但し、これは、自分の譯の拙劣さに目を塞いで述べる言葉であることいふまでもない。（一九二六・四・二六）

永田寛定

北歐篇序

南歐と違つて北歐文學に關しては、今日專問的權威的研究家と言ふものが、わが國にはない。それで諸種の雜誌や短篇小說集をあさり、大凡この程度のものを集めたらよからうとの見當を付けて編纂したのである。不備は詫ぶるの外ないが、吾等がこれだけでも集めるのに最上の苦心を拂つた點を汲んで、諒とせられん事を望む。

編者

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com